（別紙2）

審査の結果の要旨

氏名　王　海波

本論文は、満洲語およびシベ語と呼ばれる言語の諸方言の音韻論について、古典満洲語との対応関係も視野に入れつつ考察したものである。

第 1 章では、本論文が対象とする満洲・シベ語（現代満洲語諸方言とシベ語とがひとつの言語と見なすことができるという著者の考えに基づき考案された名称）に含まれる言語変種について、本論文で対象としないものを含め、それぞれの概要を述べたのち、それらに関する主な先行研究を紹介する。さらに、筆者自身がおこなった現地調査についても説明する。続く第 2 章では、満洲・シベ語に含まれる諸変種の拘束形態素が、接語、屈折接辞、派生接辞の順にあげられ、その主な働きと形態音韻論的特徴が紹介される。複合、重複、借用のプロセスについても、簡単に言及される。

第 3 章以降が本論文の中核部である。中核部前半の第 3 章と第 4 章では、著者自身が現地調査において収集したデータと先行研究のデータをともに用いながら、三家子方言、黒河方言、シベ語（本論文では「シベ方言」と呼んでいる）の音韻体系が分析される。第 3 章では分節音素が扱われ、第 4 章では、複数の分節音素に係る現象として強勢と母音調和が扱われる。

中核部後半の第 5 章と第 6 章は古典語との比較に当てられる。古典語との対応関係から現代諸方言の特徴が明らかにされる。第 3 章と第 4 章にそれぞれ対応するかたちで、第 5 章では分節音素が扱われ、第 6 章では強勢と母音調和が扱われる。

第 7 章では、第 3 章から第 6 章までの内容がまとめられると同時に、本論文で十分に扱うことができなかった点が示される。

中核部前半の現代諸方言の分析においては、著者自身が何度も現地に赴き詳細なデータを収集したことにより、現代諸方言の興味深い特徴が数多く指摘されている。シベ語において二重母音のように聞き取れる音連続は、/l/ の異音 [ɹ] の分布、イントネーションの違いによる音節数の増加、対格標識の実現形の違いを詳細に検討することにより、実は単母音を音節主音とするものと解釈できることを示した分析などが、その一例である。

一方、古典語と現代諸方言との比較を扱った中核部後半は、古典語から現代諸方言が分岐したとする作業仮説に則って淡々と語られているものの、基準とされる古典語の歴史的性質が十分に明らかにされていないため、通時的分析を尽くせていない点が惜しまれる。

とは言え、これまで十分でなかった現代満洲語諸方言の音韻について、現時点で得られる限りのデータを自ら現地調査によって収集しただけでなく、先行研究からも網羅的にデータを集めた上で、一定の方法に従って分析したことは、満洲語研究への大きな貢献であることに疑いはない。

以上の理由により、審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに十分値するものと判断する。